
スキップ・デイズ

流れ人間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スキップ・デイズ

【Nコード】

N0607I

【作者名】

流れ人間

【あらすじ】

涼宮ハルヒの話の中のある一日を抜き出して考えて書きました。

（前書き）

初めて書いたので、すごく変な感じですがぜひ読んでいただ
い。 m (m

いきなりだが、ふと俺はこの生活を楽しんでいるのではないかと思う。

ハルヒとこの高校ではじめて会い（まあ、三年前に普通の生活ではありえない方法でハルヒに会ったのだが…）SOS団と言うはたから見れば変な団としかとれない集まりを作って、宇宙人だの未来人だの超能力者という宝くじで三億円があたる確率を軽く越える低さの出会いを実現させられている。しかも、それを実現させたのがクラスで俺の後ろの席に座っている北高では有名な美少女だが性格が暴走特急の塊のような人物、涼宮ハルヒ張本人である。

キンコンカンコンコン♪

「ようやく終わったわね。さあ部屋にいくわよキョン！」

授業が終わりさて一息入れようとした時にハルヒが間髪入れないで俺に話しかけてきた。

「待て、ハルヒ。ちょっと今日は早く帰る。」

「は！？どうしてなのよ！理由を20字以上でのべなさい！」

「妹が熱で家で寝ている。だから、早く行って看護しなければなら
ない。」

俺は確かそんなようなことを言ったような気がする。今思えば、な
んであの時適当な嘘をつかなかったのだろうと思う。

「ふーん。それは大変ね…。」

ハルヒは少し悩んだ末俺の一番望んでいない解答をした。

「なんだ。だったらあたしも手伝うわよ。あっそうだ！SOS団の
みんなも手伝わせましょう！キヨン一人だとあまりの不器用さで妹
ちゃんが可哀想だから。」

といいながら、ハルヒは笑顔のまま顔を近づけた。

「待て待て待て待て！！冗談はよせ！お前たちが来て下がるものが
下がらなくなったらどうする？」

「元気になるんだったらいいじゃない。それに…今日は…その…キヨ…いやなんでもないわ。」

「?」

「そんなことよりこれは団長命令よ!さっそく私はみんなを集めてくるから待ってなさい!」

「な!?!?!?!」

というわけで、俺はSOS団と一緒に自宅に帰るのであった。しかしハルヒのあの迷いみたいのはなんだったんだ?

ちなみに、鶴屋さんもついて来るようだ。(朝比奈さんとクラスで一緒にいたところにハルヒが目撃し

「多いほうがいいじゃない。」という突き当たりばったりな理由で連れて来てしまった。

(『やれやれ。また鍋パーティーでもやる気か?』)

と思って帰宅すると家の中はまるで廃墟のような不気味な静けさでたちこもっていた。さっそく俺は妹がいる部屋に向かった。

「あつ…キョンくん。お帰り。でも部屋に入る時はノックぐらいはしてね。」

『俺の部屋に入る時は勝手に入るくせに。まったく…誰かに似ているぜ。俺の妹は…。』

「今体温計持ってくるからな。それとハルヒたちが家に来ているから。」

「

それを聞いた瞬間妹はまるで石油を掘りあてた貧乏人のような表情でベッドから飛び上がりすぐさまドアに向かった。

「えっ！ハルちゃんたちが家に來てるの！？」

「待て。お前はベッドで寝いなさい。まだ熱下がっていないだろ？」

「はい」

妹は膨れっ面で俺を見ながらこたえた。

『さて…。』と思い妹の部屋をあとにしようとした。その時だった。

ドン！！

「邪魔するわよ」あっキョンの妹ちゃん！「元気？」

ハルヒが部屋に入ってきた。その時だっただろうか？ハルヒがドアを開けた時に俺はちょうどドアの横にいたせいかドアが俺の額にクリーンヒットした。

「痛ってー！何するんだ！ハ…」

ドン…！

「やあ！キョンくんの妹ちゃん！元気っかな？」

次に部屋に入ってきた鶴屋さんが開けたドアも俺の額に当たった。

『この人連れて来なければよかった…。』

その後もあとに続けとばかりに部屋に長門、古泉、朝比奈さん、俺の部屋にいたらしい猫のシャミセン、という順番で部屋に入ってきた。

「だっ大丈夫ですか？」

朝比奈さんが額をかばう俺に向かってささやいた。

「ははは…大丈夫ですよ朝比奈さん。これくらい。心配してくれてありがとうございます。」

「そうよみくるちゃん。キョンはそんなことでは死なないわ。」

『ハルヒ。お前は少し黙ってる…。』

とりあえず俺は体温計を探しに下のリビングに向かった。

『おっ… あったあった。』

ペンさしにあった体温計を見つけて二階に上がった。ついでに熱冷まシートも一緒に持って。

妹の部屋に入ろうとした。その時に軽い立ちくらみがした。

『チクシヨー。さっきのハルヒたちのせいかな。』

しかしその立ちくらみはただの立ちくらみではなかったのだ…。俺は妹の部屋に入るが、その光景は驚くものだった。

『あれ？鶴屋さんや古泉や朝比奈さんがいない。どうしてだ？』

見るとハルヒと一緒に妹はゲームをやっており今気づいたのだが、シャミセンの姿もない。長門はただ自前の本を読んでいた。

「おい長門。少し聞きたいことがある。俺の部屋にこい。」

俺はハルヒたちには気づかれないうちに長門に言った。

「……………承諾した。」

俺と長門はハルヒたちには気づかれないように（まあゲームをやっているから気づかないだろうが…）
隣の部屋に向かった。

「長門これはお前の仕業か？」

俺は長門に静かに言った。

「そう。これは私の情報操作よって行われたこと。」

「なぜこんなことをした？またなんかお前がバグとかいう暴走で三人を消したのか？」

「違う。これは私個人でおこなった。」

長門は首を振った。

「じゃあこうしないとハルヒの機嫌が悪くなって閉鎖空間がでるのか？」

「違う。あの三人を消しても消さなくても閉鎖空間は発生しない。」

「じゃあなぜ消したんだ？」

「その質問には答えられない。でも、これだけは伝える義務が私にはある。『あとでのお楽しみ』」

「？」

「大丈夫。三人はあと10分25秒で自宅に転送される。ここにきた記憶は一時的に消去した。」

「なんでそんなことをしたんだ？」

「その質問には答えられない。」

「……」

長門はそう言っ て妹の部屋に戻って鞆を持って家をあとにして帰っていった。

俺はいろんな疑問を持ちながら妹の部屋に入った。

「あっキョン。みくるちゃんたちはなんか用があるっていつて急に帰っちゃったわよ」

『多分長門の仕業だ。』

「そうか。あれ妹の熱は大丈夫なのか？」

「今はベッドで寝ちゃった。

あっなんかそこら辺に体温計が落ちてたから適当にはかったわ。あんなに元気なのに熱がまだ下がってなかったけどなんでかしら？」

「俺は知らん。」『言わんこっちゃない。多分お前たちがきてはしやぎすぎたんだろう。』

「仕方ないわね。解熱剤はあるの？」

「ないと思うぞ。あまり薬に頼らない家系だからな。」

「何言つての！？あんたここぞと言うときに薬って必要なのよ。バカキョン！」

『知っている。そんなことは。ただのジョークだ。今は解熱剤を切らしているだけだ。』

「しょうがないわね。薬局いくわよ。キョン！あんたも一緒に来なさい！」

「ヘイヘイ。」

こうしてハルヒと俺は薬局に向かったのであった。

家の近くには薬局はないので電車に乗り隣の薬局まで行くことにした。

『そういえばここら辺はハルヒの家に近かったっけな…。』

駅に着くまで電車の中では俺とハルヒは一言も喋らなかった。（まあ、落ち着いていれば本当に綺麗な美少女なんだがなー）ハルヒはなにやら鞆の中を気にしていた。そして、俺の顔をチラチラ見てきた。

『????何を企んでる。』

隣の駅についた。さっそく商店街の薬局を目指した。

「そういえば、ここら辺はSOS団の映画のロケ地じゃないか？懐かしいなあ。」

「そうね。あっそうだ！また今度作りましょう！映画！そうね！今度は『朝比奈ミクルの冒険パート2』っていうのはどうかしら？」

「今度も朝比奈さんが主役になったら多分朝比奈さんが朝比奈さん

ではなくなってしまうから絶対にやめといて欲しい！」

ハルヒは少し頬を膨らませて

「な、何言ってるの！そ、そんなのジョークに決まってるじゃないジョークに！！でも、映画を越した何かはしたいわね。」といった。

『映画を越す何かってなんだ！？』

といってる間に薬局についた。そして子供用の解熱剤を買った。

駅前に戻るため来た道をたどっていくのだが、なにやらハルヒは顔が赤くなっているのに気がついた。

「どうした？妹の熱でも移されたか？」

「ち、違うわよ！まったく本当キョンって鈍感ね！」

「？」

『さっきから様子がおかしいな？』

俺はなぜハルヒの様子がおかしいのかこの時まったく分からなかったがすぐに分かるになる…。

「キョン！！ちょっと待ちなさい！！！」

駅前に着いて、ハルヒと別れようとした時にハルヒが言った。

「どうした？まだなんか用があるのか？」

「そ、その今日はいろいろありがとうございました。」

「いや、なんだよ急に？頭のネジでもとれたか？」

「う、うるさい！少し黙ってなさい！」

「ハイハイ。わかったよ」

「ち、ちなみに今日は、な、何月何日が分かるわよね？」

「今日か？。。月××日だが…なんかあるのか？」

「あゝもう！！キョンってどこまで鈍感なのよ！」

「とりあえずお前が言いたい事を言ってみろ。」

「あっ…わ、わかったわよ。今言おうとしたところ。じ、じゃあ言

「うわよ。」

そしてハルヒは恥ずかしながらも言った。

「キ、キヨン。お、お誕生日お、おめでとう！！こ、これからもSOS団団長として、わ、私からプレゼントがあります！！」

『あつ……。忘れてた。毎日がSOS団のことで脳が悩みに侵略されていた。』

ハルヒは顔を真っ赤に染めながら鞆の中から小さい箱を取り出した。そしてその箱を俺の胸にぎゅうつと押し込んだ。

「大切にしないで。大切にしないと死刑の上の死刑だから！！」

と言ってハルヒはまだ顔を真っ赤に染めながら駅のホームの中に消えていった。

『あん時のハルヒは朝比奈さんを越えるくらい可愛かったなー。』

家に帰ってさっそく箱を開けた。すると中には薄い緑色のハンカチが入ってた。

「・・・」

その時の俺の顔はどんな表情だったろうか？

次の日俺はいつも通り通学路の坂道を登っていた。

『昨日はおかしな1日だったな。あのあと朝起きたら妹はまるで嘘のように熱が下がった。夜中に谷口と国木田からお誕生日おめでとうメールが迷惑メールくらいしつこくきたりもした……。まあ、なんと言ってもあのハルヒからプレゼントをもらったことが一番のサプライズだった。しかし、今、一番驚いているのはハルヒからもらったハンカチを持ちながら少し嬉しそうに持ち歩いている自分の姿であることだ。』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0607i/>

スキップ・デイズ

2010年10月12日21時41分発行